

町のお姫さま

小川未明

青空文庫

昔、^{むかし}あるところに、さびしいところの大好きな^{だいす}お姫さま^{ひめ}がありました。どんなにさびしいところでもいいから人の住^すんでいない、さびしいところがあつたら、そこへいつて住^すみたいといわれました。

お供^{とも}のものは、お姫さまのお言葉^{ことば}だからしかたがありません。人のだれも住^すんでいない、山^{やま}の中^{なか}にでも、お姫さま^{ひめ}のゆかれるところへは、ついていかなければなりません。

人里^{ひとさと}を遠く離^{はな}れた山の中^{やま}へ、いよいよお姫さま^{ひめ}は移^{うつ}るようになりました。そして、お供^{とも}のものもついてゆきました。

お姫さま^{ひめ}の、歌^{うた}をうたわれる声^{こえ}はたいへんに、よいお声^{こえ}であり

ました。また、たいへんに鳴り物をならすことがお上手でありました。琴や、笛や、笙を鳴らすことの名人でありました。だから平常、歌をうたいになり、鳴り物を鳴らしておいでなさるときは、けっして、さびしいということとはなかつたのであります。

けれど、お供のものは、寂しい山の中に入つて、毎日、つくねんとしていて、退屈でなりませんでした。そこにきました当座は、外に出て、山や、溪の景色をながめて珍しく思いましたが、じきに、同じ景色に飽きてしまいました。また、毎日、お姫さまのうたいなさる歌や、お鳴らしになる鳴り物の音にも飽きてしまった。それらを聴いても、けっして昔のように感心しないば

かりか、またかというふうに、かえって、たいくつ退屈を感じさせたのであります。

ひめお姫さまは、この世のよなか中に、自分じぶんほど、よい声こえのものはないとおも思つていられました。また、自分じぶんほど音楽おんがくの名人めいじんはないと考かんがえていられました。そして、そう思つて窓まどぎわにすわつて、山やまに出る月つきをながめながら、よい声こえで歌うたをうたい、琴ことを鳴ならしていられますと、四辺あたりは、しんとしてすべての草木くさきまでが、耳みみを澄すまして、このよい音色ねいろに聞ききとれているごとく思おもわれました。

このとき、ふと、お姫ひめさまはおうたいなさる声こえを止とめ、お鳴ならしなさる琴ことの手てを控ひかえて、ずっと遠とおくの方に、耳みみをお澄すましなされました。すると、それは、自分じぶんよりも、もっとよい声こえで、歌うたを

うたい、もつと上手にじようず琴を鳴らしているものがあるのですた。

「はて、この山の中にだれが、歌をうたい、琴を鳴らしているのだらう。」と怪しまれました。そして、このことをお供の物に
おたずねなされますと、

「いえ、だれもいるはずがございません。また、私どもの耳には、
なにも聞こえません。ただ、聞こえますものは、松風の音ばかりで
ございます。」とお答え申しあげました。

「いえ、そうじゃない。だれか、きつとわたしと腕をくらべるつ
もりで、あんなよい声で歌をうたい、琴を鳴らしているにちがい
ない。」と、お姫さまは申されました。

お供のものは、不思議に思つて、耳を澄ませますと、やはり、

松風まつかぜの音おとが遠とおくに聞きこえるばかりでありました。

夜よが明あけて、太陽たいようが上のぼりますと、小鳥ことりが窓まどのそばちか近くきて、

よい声こえでさえずりました。お姫ひめさまは、まゆをおひそめになつて、

「ああ、やかましくてしょうがない。もつとどこかさびしいところへいつて、住すまわなければならない。」と申もうされました。

お姫ひめさまは、山やまはやかましくていけないから、今度こんどは、だれも住すんでいない海うみのほとりへいつたら、きつといいだろうと思おもわれ
て、荒海あらうみのほとりへお移うつりになりました。

お供とものものは、まだいったばかりの二、三日にちは、氣きが變かわわつて
よろしゅうございましたけれど、じきにさびしくなつてたまらな
くなりました。お姫ひめさまは、やはり、歌うたをうたい、樂器がっきをお鳴なら

しになりました。すると、ある夜、海の上に、ふりまいたような星影をごろんなされて、

「ああ、やかましくてしょうがない。ああ、毎晩、星が歌をうたったり、鳴り物を鳴らしているのでは、すこしもわたしは、自分の歌や、音楽に身が入らない。どうして、ああよい声が星には出るのだろう。」と申されました。

お供のものは、私どもには、ただ、さびしい、さびしい波の音しか聞こえませんが、と申しあげました。

姫さまは、もつとさびしいところがないものかと、お考えなされしました。お供のものは、もうこのうえさびしいところへいったら、自分らはどうなることだろうと思ひました。そのとき、お供

のものの、二人ふたりの中なかの一人ひとりは、

「お姫ひめさま、どうぞなんにもいわずに、私わたしどもについておいでくださいまし。」と申もうしあげました。

お供とものものは、お姫ひめさまをにぎやかな街まちのまん中なかにお連れつしました。お姫ひめさまは、はじめはびっくりなさいましたけれど、もはや、そこでは、自分じぶんの歌うたのまねをするものもなければ、また、もつとよい声こえを出だして、お姫ひめさまと競きようそう争そうをして、お姫ひめさまを苦しめるものはありませんでした。

お姫ひめさまは、結けつきよく局きよく、気楽きらくに思おもわれて自分じぶんがいちばん歌うたがうまく、音おん楽がくが上じようず手ずだと心こころに誇ほこられながら、その町まちにお住すみなされたということです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 一」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷

1977（昭和52）年C第3刷

※表題は底本では、「町《まち》のお姫《ひめ》さま」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2013年9月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

町のお姫さま

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>